

マリー・ド・フランスの『イゾペ』

酒見 紀成*

(平成24年8月20日受付)

Marie de France's *Isopet*

Kisei SAKEMI

(Received Aug. 20, 2012)

Abstract

Marie de France is said to be the first woman poet in French literature. The purpose of this paper is to examine what sort of person Marie de France was and what her *Isopet* written in Anglo-Norman was like. This examination is based on a study of the morals she gave to each story in the *Isopet*. Despite her claim that she translated it from English, it seems to me to have been translated from Latin, but she freely altered the “characters” and morals in the fables. The first English translation of *Aesop* is, as far as I know, Caxton's *Aesop* (1484), and Marie's *Isopet* precedes it by more than two and a half centuries.

Key Words: fable, Aesop, morality, Marie de France, Caxton

マリー・ド・フランスは12世紀後半のフランス生れの女流詩人である。が、ウェールズ地方の地理に明るいのので、恐らくイングランドに住んでいたと言われている¹。彼女の作品には『イゾペ』、『レー』、『聖パトリックの煉獄』などがあり、いずれも中世フランス語で書かれている。彼女は「フランス文学史上に登場する初めての女性作家」だけあって、なかなか聡明かつ有能、そして気が強そうである。『イゾペ』の後書きにこう書いている。

マリーが私の名で、私はフランスの生まれである。多くの作家が私の作品を自分のものだと言うかもしれないが、私は他の誰にもそんなことを言うて欲しくない。世に忘れられても構わないと思う者は貧弱な仕事をするものだ²。

このような性格の女性だったから、その名が後世にまで残ったのであろうが、筆者も中世英文学を学び始めた頃、マリー・ド・フランスという名前には出会ったことがある。なぜ彼女が英文学史に出て来るかと言うと、中世英文学の多くの作品がフランス語からの翻訳だからである。筆者が最近読んだオーヒンレック写本に入っている「フレーヌ

(とねりこ)」という詩も彼女の「レー」の翻訳だった。

今回取り上げる『イゾペ』とは、マリーがフランス語に「翻訳」したイソップ風寓話集のことである。彼女は後書きに「アルフレッド王が英語に訳したものをフランス語に忠実に翻訳した」と書いている。しかし、そのような早い時期の英語訳は存在しない。仮にあったとしても、マリーが古英語を理解できたかどうか。彼女の翻訳自体がキャクストンによる最初の英訳(1483年)より約300年も早いのである。Mary Lou Martin という学者は、12世紀にイソップ寓話をラテン語に翻訳した Alfred という英国人の翻訳者を国王と混同したのであろうと考えている³。また、イゾペとはイソップ、即ちアイソポスという紀元前6世紀のギリシア人の寓話作家であるが、彼のことを「ギリシア語からラテン語に翻訳した人」とも書いており、彼女の知識はあまり正確ではない。10世紀頃、ギリシア語からラテン語に翻訳したのは自称「ロムルス」という人物であり、このロムルス集がヨーロッパにおけるイソップ寓話のソースとなっているのであるが、マリーはこのロムルスのことも、写本の間違いを受け継ぎ、「皇帝」と呼んでいる。

* 広島工業大学工学部電子情報工学科

マリーは貴族階級の出のように思われる。彼女は『聖パトリックの煉獄』をラテン語からフランス語に訳しており、かなり高い教育を受けていたことが分かる。実際、彼女の『レー』は「王さま」に献呈されている。王とは、ヘンリー二世か、その長男の若ヘンリーだろうと言われている⁴。また、彼女は韻文の『イゾベ』を「この王国で最も勇敢なウィリアム伯爵のために」書いたとも言っている。これは第三代ウェセックス伯ウィリアム・ド・マンデヴィル(1189年没)か、初代ペンブルック伯ウィリアム・マーシャル(1219年没)ではないかと考えられている。そういうわけで、彼女は「ヘンリー二世とその王妃アリエノール・ダキテーヌの宮廷のメンバーだった」という推測も当たっていそうである。それは彼女が『イゾベ』の寓話に付けた幾つかの教訓からも感じられる。

イソップ寓話にはどれにも教訓が付いているのが特徴である。例えば、No. 89の「狐と狼」では、仲裁を頼まれたライオンは、「嘘と狼は相性がいいからな」と言うだけで、狐と狼のいずれにも納得できる説明をすることが出来ない。そこでマリーは「良い君主はこんなことではいけない。できる限り事態を良くし、双方の遺恨を終わらせねばならない」と忠告する。No. 2の小川で水を飲んでいて狼と子羊の話では、自分の方が川上なのに、狼は「お前が水を濁らせるので飲めないではないか」と子羊に言いかけをつける。子羊が私の方が川下ですが、と答えると、狼は、お前の親父も半年前に同じことをしたと言い、「その頃、私はまだ生まれていませんでした」と反論する子羊を殺してしまう。そしてマリーは、我々の領主や子爵や裁判官も領民に同じことをしているとコメントする。また、No. 6の「太陽の婚礼」は、太陽に子供ができれば、暑くなり過ぎて我々は生きていけないと心配する動物たちの話だが、これにもマリーは、だから領主の力をこれ以上強くしてはならないと言う。No. 7の「狼と鶴」(ギリシア語版では「狼とサギ」)は、鶴が狼の喉に刺さった骨を取ってやり、約束のお礼を求めたところ、食われなかっただけでも有り難いと思え、と狼に言われる話であり、マリーは悪い領主も同じだと言う。このような、言わば領主批判は彼女が領主たちと近い立場にあったことを示すものであろう。No. 29の教訓は「この狼のような不誠実な者を君主にしてはならない」で、No. 56は「王や君主は法を貪欲な人間に任せてはならない」、No. 62は「君主は傲慢で貪欲で嘘つきの執事を持つべきではない」というものである。

領主批判は貧者への同情となる。No. 4の「犬と雌羊」では、嘘つきの犬が羊を訴え、トビと狼を証人にする。そして証人たちの偽証により、羊は有罪となり、羊毛の外套を

売らねばならなくなり、冬、凍死する。犬とトビと狼は羊の肉を山分けする。この話にマリーが付けたコメントは、貧乏人は偽証によってしばしば財産を取り上げられるというもの。ところが、この話はギリシア語のイソップ寓話ではなく(従って岩波文庫の『イソップ寓話集』には入っていない)、パエドルスという古代ローマの寓話詩人が付け加えたものであり、そこでは偽証した狼は数日後、落とし穴にはまってしまい、「天罰」を受ける。つまり、マリーは話の筋も、教訓も変えてしまっているのである。No. 10の「狐と鷲」では、鷲が狐の赤ん坊をさらう。狐は子供を返してくれと叫ぶが、無視される。そこで松明を取り、鷲の巣のある樫の木の回りに火をつける。鷲は「消してくれ! お前の子供は返すから」と言う。マリーの教訓は、もし貧乏人が復讐することができれば、金持ちも屈服するであろう、というもの。これに対し、元のパエドルスの教訓は、「身分が高いからといって、下々の者をみくびってはいけない」で、大体同じ。No. 16の「ライオンと鼠の恩返し」でもマリーは貧者に言及している。この話は遊んでいた鼠がうっかりライオンにぶつかり、怒ったライオンに殺されそうになるが、必死に弁明して命を助けてもらう。それから間もなくライオンが人間の作った落とし穴に捕えられた時、今度は鼠がロープを齧ってライオンに恩返しをするという話。マリーの教訓は「金持ちも困った時に助けてくれる貧乏人が必要だ」というもの。

このようなマリーも支配する側の人間らしく、社会の規範から逸脱することは嫌う。No. 20の「泥棒と犬」は主君に対する封臣の務めを述べたもの。羊を盗みに行った泥棒が羊の番をしていた犬にパンをやって取り込もうとするが、犬はきっぱり断る。No. 23の「コウモリ」も同様で、ライオンの率いる獣軍と鷲の率いる鳥軍が戦争した時、コウモリは獣軍の方が優勢と見て、齧歯類の仲間に加わる。が、実は鳥軍の方が多勢だった。そこでコウモリは足を隠して獣軍を離れる。しかし、翼を広げた時、足が見えてコウモリの裏切りが露見する。かくしてコウモリは両軍から罵られ、視力と羽を失う。No. 74の「ネズミの嫁取り」のマリーの教訓は、自分の身分・階級を越えた者と結婚すべきではないというもの。かつてとても自惚れの強いハタネズミが高貴な娘と結婚したいと思った。そして最も力強い太陽の娘がいいと思い、できる限り高く昇った。すると、太陽が雲の方が強いぞ、雲が出たら自分は出られないからと言った。そこで雲の所へ行き、娘さんと結婚したいと言うと、雲が風の方が強い、風が吹いたら追いやられるから、と。そこでハタネズミは風の所へ行き、誰も風の邪魔をしようとは思わないと言っているのだから、娘さんをくださいと言う。風が答えて言うには「お前は勘違いしている。

もっと強いやつがいる。頑丈な石壁だよ」ネズミは石壁の所へ行き、娘さんと結婚したいと言う。すると石壁曰く、「君は誤解している。何も分かっていないようだな。君をここへ来させた者は、君をバカにしたんだよ。今日、君は私より強い者を見るだろう」と。「世界で最強の者、それは誰ですか?」「そう、ネズミだよ。彼は私の中に巣を作るからね」「こりゃー驚いた。私とネズミは親戚じゃないか。では、帰って仲間たちに頭を下げよう」——この話は古代インドの『パンチャタントラ』にある「目覚め(ネズミの婿とり)」と同じ。しかし、*Panchatantra* がヘブライ語からラテン語に訳されたのは1270年と言われるので、マリーはこれとは別ルートで知ったのであろう。Francisco R. Adrados というスペインの学者によれば、9世紀頃、ペルシア語を通してアラビア語へ訳され、そこから中世の寓話に入るルートもあった⁵。

マリーは同じ女性に対してどう言っているだろうか。No. 44は妻が別の男と寝ているのを見た農夫の話。妻は「あなたが見たものはみな真実だと思うの」と言って、夫を連れて行って大桶の中を覗かせる。そこには彼の姿が写っている。「しかし、それは見せかけだけで、本物ではないでしょ」と言う。それで夫は後悔する。マリーの教訓は、機転が利くのはお金や家族より貴重だということで、妻の浮気を咎めてはいない。ところが、No. 45ではこのような女は悪魔より性質が悪いと非常に手厳しい。どういう話かというと、妻が愛人と森へ入るのを見た農夫の話で、夫は跡を追う。が、男に逃げられる。夫は妻を責める。「では、財産を分けて頂戴、私は修道院に入ります」と妻。「止めてくれ、あれは嘘だった」と言う夫。「では、私の名誉のため、親戚の前でそう言ってください」と妻。マリーがこの妻を詐欺師と呼んだのは、妻が修道院を引き合いに出したからかも知れない。中世の寓話とは古代のイソップ集にはなかったもので、動物ではなく、人間が登場するものが多い。No. 95は非常に意固地な女と結婚した農夫の話。ある日、二人は気晴らしに牧場へ行った。農夫が言う、「こんなに均一に刈られた牧場は見たことがない」するとすぐ妻が言う、「大ばさみで切ったんでしょう」「いや草刈り鎌で刈ったんだよ」妻「いいえ、大ばさみです」農夫は怒った。「これでお前が馬鹿だと分かった。大鎌だ。お前はいつも自己主張をし、私のものを取り、私の足をすくう」と言って、妻を投げ倒し、彼女の舌を切り取った。それから彼は訊いた、「お前が言いたかったのは、芝を刈り込む大鎌か、芝草を刈り取る大ばさみかということだな」妻は口がきけないので、身振りで言う、「大ばさみで刈り取ったのであって、大鎌ではこの草は切れません!」教訓：愚か者は賢い者の言うことを信じず、そして怒る。だれも彼を黙ら

せられない。マリーは「彼を」と言っているのだから、意固地な人間は女性だけではないということだろう。No. 96にもよく似た女が出てくる。彼女はあまりつむじ曲がりだったので、夫が喜んでいてのを見て惨めになり、彼を避けて川の方へ行った。彼は追いかける。妻は逃げるが、徐々に追いつかれる。その時、彼女は足を滑らせ、川に落ちる。作男たちも来て川へ飛び込み、急な流れの中で彼女を掴まえようとする。農夫はそれを見て、男たちにそこじゃない、もっと上流を捜せと叫ぶ。男たちは彼女の遺体を見つける。彼女はとつむじ曲がりだったので、下流へは行きたくなかったのだ。この妻は死に際しても思い通りに振る舞ったのであった。

キリスト教に関係する話も中世になって作られたものである。No. 54は「馬のために祈った農夫」の話。ある日、農夫が教会へ祈りに行った。彼は大切にしている馬を持っていた。その馬を教会の外に繋ぎ、二頭目が手に入るようお助けくださいと祈った。その間に泥棒たちが彼の馬を盗んでしまった。それを知った農夫は、慌てて教会に戻り、「神様、もう何も要りませんから、私の馬を返してください」と祈った。No. 100は海の向こうを訪れたいと思った金持ちの話。彼は安全な航海を神に祈った。気がつくと、広い海原に出ており、彼はまた祈った。彼が大声で祈れば祈るほど、船は先へ進んだ。そして祈りが叶えられず、岸に着けないかも知れないと思ったら、また彼は神に祈った、御心が行われますように、と。その言葉の後、彼はまさに希望した港に上陸したのだった。——主は我々の必要を人間よりよくご存知でいらっしゃる。No. 55はよく教会に祈りに行く農夫の話で、彼は「主よ、どうか妻と子供たちをお導きください、他の者たちはそれには及びません」と祈った。大きな声で祈ったものだから、別の農夫がすぐに彼に言った。「全能の神がお前とお前の妻と子供たちを呪いますように」と。No. 53の「隠者と農夫」にも教会が出て来る。ある農夫が隠者の所に泊まった。そして隠者が神について話題にした時、農夫は質問した、「あの日、アダムが果物を食べた時、なぜ神は彼を赦さなかったのですか」と。隠者は何日もかかってついに答えを思いついた。彼は大きな鉢を持って来させ、テーブルの上に裏返しにして置き、その中にネズミを入れた。そして自分が教会に行っている間、決してこの中を覗いてはならぬと命じた。どんないいものが入っているのだらうと思い、農夫は我慢できずに開けてしまった。ネズミは逃げる。隠者はなぜ開けたと問い詰める。「開けなければ、私の心と体は張り裂けていたでしょう」「ネズミはどうした」「逃げました」「友よ、それは構わぬ。ところで、アダムのこともそんなに責められぬ。悪魔が神に等しい存在にしてやると約束して唆したのだから

らね」——他人に罪を負わせる者は、代わりに自分を責めよ。M. Martin は、この話は最古のヴァージョンの寓話だと言う。そうであれば、マリーが民間伝承などを材源にして作った寓話ということになる。

No. 60と **No. 70**もマリーによる再話らしい。前者は「雄鶏と狐」で、こやしの上で鳴いていた雄鶏に狐が近づいて言った。「お前さんのような高貴な鳥は見たことがない。目を瞑って歌うお前の親父さんを除けば、お前さんの声が一番澄んでいる」と。雄鶏は俺だってできるよ、と言って目を瞑って歌った。狐は飛び上がって鶏を捕まえ、森の方へ銜えて行った。開けた土地を通った時、羊飼いたちが彼を追い詰め、犬たちが吠え掛かった。雄鶏は狐に言った、「これは俺のものだから離さないと言いなさい」と。狐が口を開けた時、雄鶏は逃げて、木の幹にとまった。**No. 70**は「狐と雌熊」で、ある日、狐が雌の熊を見つけ、思い通りにさせてくれとしつこく頼んだ。「お前は悪い狐だ」「私は狐ですからね。あなたもこうなりたいですか」「とっとと失せよ。今度そんな口をきいたら、この桶板で殴ってやる」狐はなおも話しかける。ついに熊は怒って狐を追いかける。狐は熊を茂みに誘導する。イバラの山が絡みつく。熊は身動きがとれなくなる。後ろから近づく狐。そして雌熊に飛びかかる。「悪い狐め。何をする気だ」狐が答えて言う、「お前が俺を脅した時、俺が頼んだことだ」と。熊を犯す狐とはあまり聞かないが、熊が登場するのは「新しい環境の特徴」であるらしい。一方、Adrados 教授は **No. 66**と **No. 83**と **No. 91**をマリーの寓話から採録している。**No. 66**はわずか8行で、灰色の狼は産まれた時から灰色で、永遠に卑劣で醜く、悪賢いままであろうという「狼の特徴を強調しただけ」の話。**No. 83**は「蛇と野原」で、ある時、蛇がぐねぐねと野原を横切っていると、野原が蛇に言った、「気をつける。俺のものを盗むんじゃないぞ」——ずるい者同士は互いに相手が出し抜くのではと目を光らせるものだ。**No. 91**の「測量士」も新しい話。ある日、測量士が土地を測った。が、自分の物差しを呪った。これじゃ正しく測れない、と。すると物差しが言った、「私は何にもしていません。私を拒んでいるのは貴方でしょう。自分の失敗を私のせいにするとは！」

イソップ寓話はギリシア語で伝わるものと、ラテン語に翻訳されたものがある。マリーの寓話はラテン語の伝統に由来する。103話のうち、ギリシア語の寓話と同じものは25篇ぐらいしかないのである。逆に、100話(97%)が *Romulus Anglicus cunctis* というイギリスで編集されたロムルス集(136話)に見出される。しかも、話の順序もほぼ同じなのである。Adrados はいずれも今は存在しない共通の

祖本 **Anglo-Latin Romulus* に由来すると考えている。*Romulus Anglicus cunctis* の年代だが、*Aesopica* という素晴らしいイソップ寓話のサイトを運営する Laura Gibbs 女子も“? c.”としている。筆者は、マリーが最古のヴァージョンの話を幾つか持っているので、*Romulus Anglicus cunctis* より古いと考えている。このロムルス集は、Adrados によれば、5つのパートに分けられる。

- | | |
|----------------------|--------------------------------------|
| 1) No. 1~34 | Nilant の順序 |
| 2) No. 35~75 | 非ロムルス系(ただし、No.56は Nilant) |
| 3) No. 76~88 | Nilant の順序 |
| 4) No. 89~112 | Nilant にないロムルスの補遺、 <u>マリーも知らなかった</u> |
| 5) No. 113~136 | Alfred による付加 |

Nilant とは *The Romulus of Nilant* と呼ばれる校訂本のことで、Hervieux という学者の考えでは **Anglo-Latin Romulus* に近い本である。だから、*Anglicus cunctis* の一番古い段階は 1) と 3) だけが連続した状態、二番目に古いのはこれに 2) が加えられた状態、次に 5) が加えられた状態(マリーが見たもの)、最後の段階は 4) も追加された状態ということになる。つまり、**Anglo-Lat. Rom.* には幾つかのヴァージョンがあったことになる。が、筆者の想像では次のようになる。

*Anthology → **Anglo-Lat. Rom.* (+) → **Marie** (+?)
 12 c. by Alfred 12 c.
 Part 4を欠く 103話

→ *Comp. Derivative* (136話)
Part. Derivative

Complete Derivative とは *Romulus Anglicus cunctis* のことであるが、これが Marie に基づくとすると、大きな難点が生じる。即ち、Marie が知らなかった Part 4) の24話はどこから来たかという問題である。やはり、Adrados が言うように、1)~5) のすべてを持つ **Anglo-Lat. Rom.* があったのだろうか。

ギリシア語にもある25の寓話はマリーの **No. 40**までに現れる。これらは岩波文庫で読めるので、タイトルのみ挙げる。**No. 2**「狼と子羊」、**No. 3**「鼠と蛙」、**No. 5**「犬とチーズ」、**No. 6**「太陽の婚礼」、**No. 7**「狼と鶴」、**No. 9**「都会の鼠と田舎の鼠」、**No. 10**「狐と鶯」、**No. 11A**「ライオンと水牛と狼」、**No. 11B**「ライオンと羊と山羊」、**No. 13**「鳥と

狐」, **No. 15**「じゃれつくロバと主人」, **No. 16**「ライオンと鼠」, **No. 17**「燕と亜麻の種」, **No. 18**「王様を欲しが
る蛙」, **No. 20**「泥棒と犬」, **No. 22**「兎と蛙」, **No. 24**「水
辺の鹿」, **No. 26**「狼と犬」, **No. 27**「胃袋と足」, **No. 30**
「狼と羊飼い」, **No. 35**「ロバとライオン」, **No. 36**「病
気のライオンと狐」, **No. 37**「ライオンと農夫」, **No. 38**「蚕
と駱駝」, **No. 39**「コオロギと蟻」, **No. 49**「鍛冶屋と斧」。
—これらの特徴は話の長さである。No. 15はわずか5行
であったのが、マリーでは50行。No. 22もわずか5行で
あったのが、マリーでは40行。No. 37も8行足らずであ
ったのが64行に膨らんでおり、いっそう物語らしくなっ
ている。

もう一つの違いは登場する動物が替えられていること
である。No. 5は元はチーズではなく、肉であった。チーズに
替えたのは、M. Martinによれば、マリーのものである。
彼女はNo. 39でも蟬をコオロギに替えている。ギリシア系
以外の寓話でも見られる。**No. 12**の「鷺とカラス」では、
鷺が食べたかったのはパエドルスでは亀であった。これ
を貝に替えたのはマリーである。また、**No. 61**の「狐と鳩」
でもマリーは小鳥を鳩に替えている。(これらの変更点—チ
ーズと鳩—を Complete Derivative は受け継いでいるので、こ
れはマリーより後と考えるのである)。**No. 14**の「老いば
れのライオン」は、パエドルスやアダマールのロムルス集
(11世紀)では、ライオンを蹴っているのは猪と雄牛とロバ
であるが、マリーでは山羊、ロバ、狐である。—登場人
物を替えたのはマリーだけではない。紀元80年頃、ギリシ
ア語の韻文訳を書いたバプリオスもしている。**No. 38**「蚕
と駱駝」は、駱駝の毛にのって移動した蚕の話で、蚕が
お礼がしたいと言うと、駱駝はそこにいたことさえ知ら
なかったと答える。が、バプリオスのタイトルは「ブヨと牛」
である。この話をバプリオスはオリエントの寓話集から
取ったらしいのだが、そこでは象であった。小堀桂一郎氏
は、象を見たことがなかったバプリオスが雄牛に取り替
えたのであろう、と。パエドルスも替えている。例えば、**No.**
11A「ライオンと水牛と狼」と**No. 11B**「ライオンと羊と
山羊」はいずれも「獅子の分け前」という話で、獲物を
ライオンが独り占めにする話だが、ライオンと一緒に狩
りをする仲間を雌牛と山羊と羊といった草食動物にし
てしまったのは、パエドルスらしい。

マリーのNo. 41以降の寓話にはほとんどBen E. Perryの
番号が付いていない。1番から471番までがギリシア語の
寓話で、472番から最後の725番までがラテン語の寓話
であるが、Perry Indexは584番で終わっている。なぜなら
585～725番は中世に作られた寓話だからである。従って、マリー

のNo. 41以降はほとんどすべて中世の寓話ということに
なる。

Perry 472～557	パエドルスに由来する (ペロッ ティの補遺を含む)
Perry 558～579	アダマールに由来する
Perry 580～584	アヴィアーヌス (4世紀末) に由 来する
585～725	中世に作られた寓話 (マリー、オ ールド・チェリトンなど) ⁶

驚いたことに、650～692番はRomulus Robertiというロ
ムルス集から採録されており、この本はマリーの『イゾペ』
をラテン語に訳し直したのと言われている。数えてみた
ら、マリーの寓話と似ているものが43話のうち32話もある
—**No. 42**「医者と金持ちとその娘」(ラテン語のタイ
トルも同じ)、**No. 46**「鳥たちと郭公 (郭公と鳥たち)」, **No.**
47「農夫とその馬 (馬を売る農夫)」, **No. 52**「竜と農夫
(卵を預ける竜)」, **No. 53**「隠者と農夫 (自分の奴隷を調
べる隠者)」, **No. 54**「神に馬を願った農夫 (神にもう一頭
の馬を求める農夫)」, **No. 55**「妻と子供たちのために祈
った農夫 (太陽に健康を祈願する人)」, **No. 56**「農夫と黒
丸鳥 (都会人と黒丸鳥)」, **No. 57**「農夫と小鬼 (三つの願
い)」, **No. 58**「狐と月 (狐と月の影)」, **No. 61**「狐と鳩」,
No. 62「鷺と鷹と鳩」, **No. 63**「馬と生垣 (馬と畑)」, **No.**
64「金持ちと馬と雄山羊 (雄山羊と共に馬を売る人)」,
No. 72「狼とハリネズミ」, **No. 75**「甲虫 (傲慢な甲虫)」,
No. 78「狼とハリネズミ (毘にからまった狼とハリネズミ)」,
No. 79「狼と水夫 (真実を教える狼と水夫)」, **No. 81**「鷺
と鷹と鶴」, **No. 82**「説教者と狼 (文字を習う狼)」, **No.**
84「ツバメとスズメ」, **No. 85**「農夫と雄牛 (自分の糞を
引きずり出す牛たち)」, **No. 88**「二匹の狼 (好意を寄せる
狼たち)」, **No. 90**「狼と子山羊 (雌山羊と狼)」, **No. 92**
「雌鹿と子鹿 (子鹿に教える鹿)」, **No. 93**「雛たちに
教えるカラス」, **No. 95**「農夫と反対する妻 (論争好き
な妻)」, **No. 96**「農夫とつむじ曲がりの妻 (つむじ曲
がりの妻)」, **No. 97**「野兎と鹿 (角を請い求める兎)」,
No. 98「狼と鳩 (狼と小枝を集める鳩)」, **No. 100**「海
の向こうを訪れたいと思った金持ち (小船の上で神に
身を委ねる人)」, **No. 102**「猫とハタネズミとイエ
ネズミ (自分は司教だと言う猫)」。こうして見ると、
ラテン語のタイトルの方が内容を表している方が分
かりやすい。

Adradosはマリーがイソップ寓話に加えたのは3篇だ
と云うが、Laura Gibbsは「マリー・ド・フランスのロ
ムルス」として22篇載せている。マリーはそれらをどこから入

手したのであろうか。M. Martin は口承の民話を考えている。先に、最古のヴァージョンだとして挙げた No. 53, No. 60, No. 70, それからマリーが初めてチーズや小鳥に替えたという No. 5と No. 61なども民話が材源であるらしい。また、No. 41「偉そうに見られたくて密談する農奴」、No. 54「神に馬を願った農夫」、No. 55「妻と子供たちの為に祈った農夫」、No. 64「雄山羊と共に馬を売る人」、No. 90「狼と子山羊」、No. 91「測量士」、No. 92「子鹿に教える鹿」、No. 99「狐と猫」、No. 100「小船の上で神に身を委ねる人」なども民話に由来するらしい。——もう一つの材源は東方の「選外寓話集 (Extravagantes)」と呼ばれているもので、キャクストンの『イソップ』第五巻の17篇はこの本から取られている。マリーもこの本を知っていたらしい。先に挙げた「鼠の嫁取り」の他に、Adrados は17の話を挙げている。うちマリーにあるのは13篇で、そのうち6篇は民話のところにも出てきたもので、「郭公と鳥たち」、「都会人と黒丸鳥」、「三つの願い」、「狐と月の影」、「文字を習う狼」、「子鹿に教える鹿」である。それ以外は、No. 44「妻とその愛人」、No. 48「泥棒とサタン」(マリーのは「泥棒と魔女」)、No. 50「狼と羊」、No. 66「灰色の狼」、No. 69「ライオンと狐」、No. 71「病気のライオンと鹿と狐」、No. 99「狐と猫」である。が、No. 44と No. 48と No. 50は中世的な感じがする。No. 48は魔女に置き換えられているし、No. 50は、四句節の間は肉を食べるのを控えると誓った狼の話で、狐は丸々と太った羊を見て誓ったことを後悔し、あの羊は鮭だと思ふことにして料理しよう、と言う。「選外寓話集」には狼と狐が多く現れる。

No. 69と71はどちらにも悪賢い狐が登場する。前者では、病気になったライオンのため、すべての動物が集り、ライオンにどんな薬を与えるか相談する。狐なら病気の治し方も、鳥との話し方も知っているからと、彼に使いを送った。ずる賢い狐は外までは来たが、近くに隠れてしまう。ライオンは怒って執事の狼を呼び、なぜ狐は来ぬと問う。狼「私が捕えてきましょう。狐を同族への見せしめに絞首刑になされませ」。それを聞いて狐は怖くなり、恐る恐る入ってきた。ライオン「遅いではないか。どうしたのだ」。狐は答えて言う、「薬が見つからなかったのです。ですが、サレルノまで行き、医者たちから処方箋を書いてもらいました。先ず、狼の皮をはぎ、彼の血を集めてあなたの胸に塗るのです」と。狼は捕えられ、皮をはがれたものの、何とか逃げ出した。が、ハエやアブから刺される始末。そこへ狐が来て曰く、「帽子も被らず何をするおつもりですか。二度と悪いことはしないことです」No. 71でもライオンが病気になる。彼はすべての領主を集め、腕のいい医者はいないか尋ねる。みなが言う、鹿の心臓を食べるま

では治らないでしょう、と。彼らは鹿を呼びにやるが、来ない。二度目の召喚で恐る恐る来た。お前の心臓が要るのだと聞かされ、辛うじて逃げる。三度目に呼ばれると、彼は来て殺された。みなで鹿の皮をはぐ前に、狐が密かに鹿の心臓を盗んで食べてしまう。みな狐の仕業だろうと言い、狐を召喚する。狐は誓って盗んでいないと言う。もし私がそんな悪いことをしたのであれば、首を切り落とされてもよい。さあ、王の御前へ行こう、疑いを晴らしてみせる、と。家臣たちは心臓が無くなったことを王に告げる。すると狐は、そんなものは元々無かったのです。あの鹿は殺されると知って逃げましたが、三度目に召喚されるとやって来ました。その時、彼の心臓はなかったのです。そうでなきゃ、のこのこやって来ないでしょう、と。ライオンは言う、確かに、鹿は心臓があたったら決して戻ってこなかったろう。狐は無罪放免にせねばなるまい、と。——『ライネケ狐物語』に似ている。一方、No. 99の「多くの手練をもつ狐と一つしかもたない猫」では狐の方が犬たちに引き裂かれる。

ここまではまだ名前を挙げていない寓話が26篇残っている。No. 1の「雄鶏と宝石」は堆肥の山で食べ物を捜していた雄鶏が宝石(元は真珠)を見つけるが、俺にとっては腹の足しにならん、という話で、アデマール集でも最初にある。No. 8はお産をする雌犬に自分の家を貸してやった雄犬が追い出される話。No. 19の「鳩と鷹」では、鳩たちが守ってもらうために鷹(パエドルスではトビ)を王に選ぶが、鷹は公然と鳩を襲うようになる。だから悪い領主を選んでほならないとマリーは言う。No. 21の「狼と雌豚」では、お産をする雌豚に狼が「今産んだら、お前を楽にしてあげられるよ」と言うが、もちろん雌豚は断る。そして男性はお産に立ち会うべきではないとマリーは言う。No. 25「夫を吊るした寡婦」は中世的である。絞首刑になった泥棒の遺体を、親戚の騎士が降ろして埋葬する。その結果、彼も絞首刑の宣告を受ける。そこで毎日、主人の墓参りに来ていた立派な未亡人に目をつけ、言い寄る。彼女はそれに答える。そして彼が追われていることを知り、主人の遺体を代わりに吊るしましょうと言う。パエドルスでは騎士ではなく、死体の見張りをしていた兵士の一人であり、彼は追われていたわけではない⁷。No. 28「猿と狐」は、むき出しのお尻を覆いたいので、君の尻尾を少し分けて欲しいと狐に頼む猿の話。狐は、この尻尾は引っ張り出せない所では決して使わないと言って断る。No. 31は孔雀が美しい羽を持っているにも拘らず、サヨナキドリのような声をくださいと女神に頼む話。人は持てば持つほど、より多くのものを渴望するとマリーは言う。No. 32は、山羊に育ててもらった子羊の話で、もう大きくなったので羊の

所に帰りなさいと言う山羊に、子羊は私を育ててくれた貴方が私の母親ですと答える。No. 33「屠殺者と羊」は、羊を連れ去る屠殺者に気づきながら、何もしなかったために一頭だけになった羊の群れの話。No. 34は、皇帝に育てられた猿が森に帰って猿たちの皇帝になった話。そこへ正直者と嘘つきの二人の男が通りかかる。猿の皇帝は二人の男に自分たちの宮廷をどう思うかと尋ねる。正直者は「あなたも、あなたの息子も醜い猿にしか見えません」と答えた。一方、嘘つきは「こんな素晴らしい宮廷は見たことがない」と答えた。すると、猿の皇帝は嘘つきを手厚くもてなし、正直者は引き裂かれてしまった。モラル：宮廷のような所では正直者は尊敬されない。No. 40は羊をいじめる鳥の話。羊曰く、「犬にとまったら」すると、カラス「誰を襲うことができ、誰にお世辞を言うべきか分かっている。だから長生きできるのさ」と。No. 43は甲虫が農夫のお尻の穴から入り込む話。

もうお分かりのように、イソップ寓話は決して子供のための童話ではなく、世間智に満ちた書なのである。No. 51は「この子猿、かわいいね。抱かせておくれ」と熊に言われ、子猿を渡して食べられた母猿の話であり、モラル：秘密や自分の思いをさらけ出してはならない。No. 73は忠誠を誓い合った「農夫と蛇」の話。ある日、蛇が尋ねた、「日に二回、牛乳を私に届ける契約を結んでもらえませんか。そしたら私が知恵を分けてやり、貴方を裕福にしてあげましょう」と。それから蛇は長年住んでいる岩の穴へ彼を案内した。農夫は承諾した。蛇は彼に畑の耕し方や種の蒔き方を教えた。かくして農夫は金銀を手に入れ、人々は感心した。しかし、蛇が言うには、彼が悪いことをすれば、金銀をすべて失うでしょう、と。農夫はそのことを妻に話す。すると、妻が言うには、「こうすれば大丈夫。その蛇を殺しましょう。貴方は蛇の思うままになっている。ひるまずに蛇から自由になりなさい。手桶いっぱい牛乳を持って行ったら、少し下がるのです。そして蛇が出てきたら、鋭い斧で蛇を打ちのめすのです」農夫は了承する。彼は牛乳を岩の前に置くと、二三歩下がった。蛇が出てくる。農夫は斧を振り上げる。空気を切り裂く音に蛇は岩の中に戻る。農夫は悲しそうに家に帰る。その次の日、彼の飼っていた羊はみな小屋の中で死んでいた。赤児も殺されていた。悲しみと怒りから農夫は妻に言った。「お前のせいだぞ。さあ、どうする？」妻は彼に言った。「あの蛇に赦しを乞うのです」農夫は温かい牛乳を持って出かけた。そして罪を告白し、蛇に慈悲を乞う。蛇が訊く、「その牛乳で何が欲しいの」農夫「慈悲だよ。もう一度友達になりたい」蛇が答える、「そんなものは要りません。でも、今まで通り、牛乳を届けてくれたら、あなたは報われるでしょう。ただ

し、牛乳を置いたらすぐに離れなさい。この岩についた傷がある限り、あなたを信じることはできないので。あなたも揺籠を見るたびに私が赤児を殺したことを思い出すでしょう」モラル：愚かな女の助言に耳を傾けてはいけぬ。

残りはタイトルのみ挙げる。No. 59「狼と鳥」、No. 65「狼と甲虫」、No. 67「鷹とサヨナキドリ」、No. 68「孔雀の羽を身に着けた鳥」、No. 76「猪とロバ」、No. 77「アナグマと豚」、No. 80「鷹とフクロウ」、No. 86「ハエと蜜蜂」、No. 87「トビとカケス」、No. 94「雄山羊と狼」、No. 101「騎士と老人」、No. 103「女と雌鳥」。——アヴィアヌス集は全部で42篇、ロムルス集は83篇、アデマール集は67篇であるから、マリーの『イゾペ』は多い方である。それから、小堀氏も書いておられたように、イソップ寓話の日本語訳はギリシア語系の本からの訳が多く、ラテン語系のイソップ寓話の訳は少ないように思われる。そういう意味でも、キャクストンの『イソップ寓話集』の伊藤正義氏による翻訳が古本でも手に入らないのは残念である。この中期英語訳は、シュタインヘーヴェルがラテン語からドイツ語に訳し、それをジュリアン・マショーがフランス語に訳したもののからの重訳である。——実はイソップの寓話は、室町時代後期と江戸時代に日本に入って来ていたのである。ローマ字で書かれた天草本『イソホのファブラス』と文語体の『伊曾保物語』がそうで、いずれもシュタインヘーヴェル本(164篇)が底本だと言われている。このラテン語・ドイツ語対訳本は1476年の出版だから、マリーの『イゾペ』が如何に早いか分かるだろう。ラ・フォンテーヌ(1621-95)の『寓話 上・下』(岩波文庫)もあるが、これは「更に自由に変形され、自身の着想によるものも含めて全く新しい世界」を創りあげているとあり、今回は比較の対象にはしなかった。最後に、マリーの候補者を挙げておこう。いずれも高貴な女性たちである。

- 1) ロムジー尼僧院長。Stephen王(1135-54)の末娘(ヘンリー二世のいとこ)
- 2) シャフツベリー尼僧院長。ヘンリー二世の異父姉妹(ルイ七世とアリエノールの娘)
- 3) レディング尼僧院長
- 4) バーキング尼僧院長
- 5) マリー・ド・ムーラン(Hugh Talbotの妻)

注

1. Wikipediaの記述に拠る。マリーの『レー』にある「ヨネック」や「ミロン」には、ウェールズ地方にあるカールリオンの町が登場することから、マリーは「このあたりの土地に詳しいらしい」(月村辰雄氏)。

2. Harriet Spiegel による英訳からの重訳である。
3. Alfred による英訳は存在したと Michael Lapidge and Jill Mann は考えている。See “Reconstructing the Anglo-Latin Aesop: the Literary Tradition of the “Hexa-metrical Romulus” in *Lain Culture in the Eleventh Century* (Brepols, 2002).
4. Wikipedia の記述に拠る。
5. F. R. Adrados (2003, Vol. II, p. 564).
6. オルド・チェリトン (c.1185 – c.1247) は長年パリに暮らした英国人で、ロムルス集や『狐物語』などを基にラテン語で『寓話』(117話)を書き、説教によく使われた。
7. 「夫を吊るした寡婦」の材源はペトロニウスの『サテュリコン』にある「エフェソスの寡婦」である。兵士を騎士に替えたのはマリーかも知れない。

文 献

- Adrados, Francisco R., *Inventory and documentation of the History of the Graeco-Latin Fable*, translated by L. A. Ray & F. Rojas del Canto (Brill, 2003)
- Jacobs, John C., (tr.) *The Fables of Odo of Cheriton* (Syracuse University Press, 1985)
- Gibbs, Laura, (tr.) *Aesop's Fables* (Oxford University Press, 2002)
- Lenaghan, R. T., (ed.) *Caxton's Aesop* (Harvard University Press, 1967)
- Martin, Mary Lou, (tr.) *The Fables of Marie de France* (Summa Publications, 1984)
- Niermeyer, J. F. & C. van de Kieft, *Medieval Latin Dictionary*, revised by J. W. J. Burgers (Brill, 2002)
- Perry, Ben Edwin, *Aesopica*. Vol. 1 (University of Illinois Press, 1952)
- Spiegel, Harriet, (tr.) *Marie de France Fables* (University of Toronto Press, 1987)

- 岩谷 智・西村賀子訳『イソップ風寓話集 パエドルス・バブリオス』(国文社, 1998)
- 木村建夫訳『ウィリアム・キャクストン きつね物語』(南雲堂, 2001)
- 小堀桂一郎著『イソップ寓話 その伝承と変容』(中公新書, 1978)
- 下川 博訳『パンチャタントラ物語』(筑摩書房, 1996)
- 月村辰雄訳『十二の恋の物語: マリー・ド・フランスのレー』(岩波文庫, 1988)
- 中務哲郎訳『イソップ寓話集』(岩波文庫, 1999)
- 西村正身訳『知恵の教え』(ペトルス・アルフォンシ著, 溪水社, 1994)
- 松原秀一『中世の説話 東と西の出会い』(東京書籍, 1979)
- 村上勝也「『イソップ寓話』変容考——「鶯と蝸牛の事」について——」, 吉川守先生御退官記念論文集編集委員会『言語学論文集』(溪水社, 1995)

イソップ寓話の木版画

<http://mythfolklore.net/aesopica/aesop1501/index.htm>

マリー・ド・フランスの絵



from Arsenal 3142